

『千の魔剣と盾の乙女4』

著：川口士絵：アシオ 試し読み版



魔剣を質に
入れてでも
買うのです

2011年
9月17日
発売予定！



Thousand and aegis 4 Character introduction

サウザンド イージス
千の魔剣と盾の乙女4 キャラクター紹介



ロックの師で、ニューのかつめの旅仲間。
ギルドに属さない孤高の魔剣使い。31歳。



フィルの錬成術の師で、
かつめのバルトウータスの仲間のひとり。
組織運営や作戦立案などの頭脳労働に秀でている。42歳。



魔王討伐を目指し、高度な錬成術も操る魔剣使い。
鎧騎士の人形を術で操り戦わせるなど
技巧にも長けている。19歳。



エリシアの師匠。バルトウータスのかつての
旅仲間でもあり、歴戦の女剣士。25歳。



ロックたちが出会う熟練の魔剣使い。
魔物たちとの戦いで片腕を失い金属義手をしている。54歳。



強固な魔法盾を使いこなす、ロックの仲間。
武器は小剣。17歳。



高い戦闘技術を持つ魔槍使いの少女。
騎士道にあこがれている。18歳。



魔剣を使う若き剣士。
やや猪突猛進しすぎるきらいがある。16歳。



錬成師。幼い外見とは裏腹に
護身用の仕込み剣も使う。15歳。

其は臚に咆えるもの

星より出でて星となるもの

爪はたやすく地を砕き、牙は神々さえも滅ぼす

翼を広げればこの世は瞬く間に明けない夜となり

ひとたび飛翔すれば嵐の吹き荒れぬところはなし

神も魔も寄せつけることなく

ひとのみ、近づくことを許す

なれど、触れた者ごとごとく瘴気にて死に至る

神々は其を封じ、引き換えに数多のものを失う

神々は地上を離れ、ここにひとの時代来たれり

幾星霜を経て、それはなお闇の底で眠り続ける

星の海に舞うことを夢見て、静かに眠り続ける……

序

紺碧こんぺきの海原うなばらを臨む崖のせの上に、それは立っていた。

薄汚れたローブに身を包んだ姿は、遠目には人間に見えるかもしれない。しかし、顔が見えるぐらいの距離まで近づいたら、気の弱い者ならば腰を抜かすだろう。

ローブの中には骨しかないのだから。

人間の骸骨に酷似した姿の魔物が、ローブだけをまもって岸壁にたたずんでいるのだ。

この魔物の名をフィンヴァラという。骨だけの首には、巧みな装飾をほどこした黄金の首環トルクが半ばまで埋めこまれていた。この魔物が魔王に次ぐ実力を持っていることの証である。

フィンヴァラは、無言で茫漠ぼぼくたる海を眺めていた。周囲に響くのはただ潮騒しほざねばかりだ。

「——よくそんなところに立っていられるわねえ」

背後から呆れたような女性の声。フィンヴァラは顔をすこしだけ動かして、黒く虚ろな眼窩がんかの片方だけをそちらに向ける。ひとりの美女が空中に浮いていた。

「あたしだったら、波が怖くて近寄れないわあ」

豊かな紫色の髪を腰まで伸ばし、暗闇を織りあげたかのようなマントに身を包んでいる。マントの下には、わずかばかりの薄布に覆われた、優美な曲線を描く蠱惑的な姿態しんたいがあった。

人間と変わらない容姿ようしをしているが、彼女もまた魔物である。その細い首にはフィンヴァラ同様、金色に輝く首環トルクが飾られていた。

「リヤナンシーか」

フィンヴァラは一切口を動かさずに、言葉を発した。この骸骨の魔物は独特のやりかたで己おのれの『声』を空間に発している。

リヤナンシーに微笑みかけられても、フィンヴァラは路傍の石を見るていどの反応しか示さなかった。海面へと視線を戻す。興味深そうな声を発した。

「不思議なものだ。海にはなぜ、我々を滅ぼす力があるのか。これさえなければ——」

「もっと早く、人間を滅ぼすことができていたのに……かしらあ？」
フィンヴァラの言葉の続きを、リヤナンシーは推量してみせる。実際、海という障壁しょうへきがなければ、勇者サーシャが現れるより前に、魔王と魔物の群れは人間を滅ぼしていただろう。

「それもある。だが——」

白い骨の魔物は逡巡する様子を見せたあと、顔は海に向けたままリヤナンシーに尋ねる。

「おまえは、この海の前にあるものを見たことがあるか？」

「私はこの大陸のどこにでもいたけれど、海を越えたことはないわよ。人間たちによれば、世界の果てになっていたり、古の海いにしへのうみの国があったりするそうだけどねえ？」

リヤナンシーの声には、かすかだが意外だという響きがある。その驚きが、人間たちの語り

継ぐ伝承について話させてしまったのだ。

「世界の果てか。見てみたいものだ」

はるか先の水平線を見ながら、フィンヴァアラは独語した。
「ところで、用件は何だ。見送りに来たわけでもあるまい」

そう訊いたときには、魔物の声は無機質なものに戻っている。微笑はそのままだに肩をすくめると、リヤナンシーはフィンヴァアラの隣へふわりと飛んだ。

「饒別せんべつよお。といつても、私からじゃないけど」

言葉と同時に、耳障りな金属音を響かせて何か地面に落ちる。それは六本の剣だった。いずれも独特の造りをしており、ただならぬ力を持っていることが一目でわかるものばかりだ。

「……魔剣か？」

フィンヴァアラの声が驚きと不審の響きを帯びる。

鉄や鋼の刃では一切傷つけない魔物に通じる、人間たちの武器。それが魔剣だ。強力な魔剣を歴戦の戦士が振るえば、巨大で凶悪な魔物を打ち倒すことさえ可能である。

「ケンコスから。大陸を歩きまわって、光の剣を砕ける魔剣をさがしていたそうよお」

ケンコスは、フィンヴァアラやリヤナンシーと同じ黄金の首環トルクつきだ。彼はいま、それまでその任についていたフィンヴァアラに代わり、魔王を見守っているはずだった。

「この六本は、すべて駄目だったということか」

「ええ。でも、これらの魔剣が弱いというわけじゃないわ。あの光の剣クラウグラスが強すぎるのよねえ」
魔物たちの王バロールの魂は、ある人間の娘の内に封印されている。

娘の名はサーシャ。彼女は神々の武器とされる光の剣を振るって魔王と戦った。そして、魔王の肉体を滅ぼし、光の剣の力でもって魔王の魂を己の内に封じこめたのだ。

「私の代わりに、ケンコスに礼を言っておいてくれ」

フィンヴァアラはそう言いながら口に手を伸ばし、奥歯を一本抜き取る。歯というよりも牙と呼ぶべき形状をしたそれを、無造作に地面に放った。

人間には発することのできないような呪文を唱えると、地面に落ちた歯が禍々まがまがしい金色の光を放つ。光に包まれて歯は膨張しながら歪みとねじれを繰り返して、一体の骸骨に変化した。

眼窩がんかの奥に黄色い光を宿し、大きくふくらんだ左右の肩からそれぞれ三本ずつ、合計六本の腕を持つ異形の骸骨だった。

フィンヴァアラの無言の命令に従い、六本腕の骸骨は魔剣を拾いあげる。

「あなた自身は使わないのお？」

「私には己の手がある」

そう答えたとき、強い風が吹いた。海がうねり、くぐもった悲鳴をあげる。風はすぐに止まず、フィンヴァアラのローブは煽られて激しくはためいた。

「——来たか」

遠くに鳥影が見えた。上に瓦礫の山を積みあげた奇怪な形状の鳥は、海流に乗って少しずつ近づいてくる。フィンヴァラも、リヤナンシーも、鳥の正体をむろん知っていた。

ガーリヤというのが、島と、そこにかつてあった都市に人間たちがつけていた名だ。

諸都市の中でも際立って造船、航海の技術に長け、優れた技量を持つ職人と船乗りを数多く擁していた。そのときには『造船都市』と呼ばれていた。

およそ二十年前、黄金の首環つきであるナックラヴィーと、それに率いられた魔物の群れによって滅ぼされ、いまではこう呼ばれている。

廃墟都市と。

1 霞む螢

広い部屋の中に、ひとりの少年と三人の少女が立っていた。

石造りの壁で囲まれた何もない部屋だ。扉は鉄製で、屋根は高く半球状を描いている。

「見てのとおり天井は高く、壁も並の建物の倍以上厚くできています」

四人の中でもっとも小柄な、青い髪を腰まで伸ばした少女が天井を見上げて口を開いた。

裾のゆつたりとしたローブをまとい、黒い刀身の大剣を両手で抱えて、足元には巨大なハンマーを置いている。かわいらしい顔だちながらまったくといっていいほど愛想がない。

「ここを貸してくださったエイモンさんも、騒音はまず漏れないし、少々の爆発ではびくともしないと仰ってました。なので、安心してくだささい」

『錬成都市』コノートには試舎と呼ばれる建物が数多くある。主に錬成術の実験に使われる施設で、錬成師エイモンに借りたこの部屋もそのひとつだ。

「いや、そんな爆発とか起きないから」

青い髪の少女——フィルの言葉に、金色の髪をツインテールにしている少女がとんでもないという顔で手を振る。細く編んで垂らしている一房の髪が、小さく揺れた。彼女は身体の各所を覆う型の赤い鎧を身につけ、左手には、小剣の鞘も兼ねた小型の盾を持っている。

「フィル。あんただっついままで何度も見てきたでしょ。ただ折れるだけだっついですが、エリシア。今回は冗談や洒落抜きで何が起こるかわからないのです」

いつになく真面目なフィルの返答に、金髪の少女——エリシアは困ったような顔になる。正面に立っている砂色の髪の少年にちらりと視線を走らせた。

少年は、足元に置かれた五本の剣を無言で見つめていた。陽に焼けて引き締まった顔には隠しきれない緊張がにじみ出ている。

この五本はただの剣ではない。すべて、フィルの錬成術によって造られた魔剣だ。

精霊と意志をかわし、その力を借りて物質を変化、精錬させる技術を錬成術と呼び、その使
い手を錬成師と呼ぶ。フィルはこの四人の中で唯一の錬成師だ。

「ロック。はじめましょう」

艶やかな長い黒髪を持つ少女が、努めて明るい声を出した。女性陣の中ではもともと背が高く、まとう雰囲気もやや大人びている。緑を基調とした長い裾を持つ服の上に、灰色の革鎧を身につけていた。その手にあるのは無骨な形状の銃槍で、足元には荷袋が置かれている。

彼女の名はナギ。四人の中では最年長の十八歳だ。

ロックと呼ばれた少年はびくりと肩を震わせたあと、気を取り直すようにナギへと笑いかけた。中肉中背の体格で、黒い服の上に粗末な革鎧を着こんでいる。

「そうだな、さっさとすませるか。右から順に強度の弱いやつでいいんだっけ？」



こくりとフィルがうなずくのを見て、ロックはいちばん右に置かれている剣をつかんだ。

「エリシア、頼む」

金色の髪の少女はロックと一対一で向かいあうと、左手の盾から小剣を抜く。

「——光護」

呪文に反応して、盾が紫色の光を放った。光は瞬く間に結晶化して、半透明の大盾ができあがる。エリシアは盾をかまえ、腰を落として激しい口調で叫んだ。

「いいわよ。来なさい、ロック！」

ロックは魔剣を両手で握りしめると、エリシアの盾に向かって斬りつけた。彼女の盾の固さはよく知っている。だから、一切遠慮はしない。全身に力をこめ、気合いの声をあげながら正確に踏みこんで、理想的な速さで振りおろし、叩きつける。

不意に、ロックの手から剣の感触が、そして腕からは剣の重みが消えた。魔剣は紫結晶の盾に触れる直前で、音もなく砕け散ったのだ。

手に残ったのは、剣の柄と亀裂の入った鏢だけ。刀身は文字通り粉々になり、大きいものでも小指の爪ほどの欠片となった。床に転がっている。

ロックは声も出ず、蒼白な表情でそれを見下ろした。いくらたいした強度の魔剣ではないとはいえ、ここまで跡形もなくなるものなのか。

「——ロック」

エリシアの声でロックは我に返る。彼女の声音もまた、隠しきれない驚きを帯びていた。しかし、それをエリシアは強引に押し潰す。

「続けるわよ。ほら、次の剣をとって」

ああ、と答えたロックの声にはあまり力がなかったが、それを本人も自覚したらしく、魔剣を両手で握りしめてから一度、深く呼吸をする。

「いくぞ！」

再び、ロックは魔剣を振るう。今度は命中したが、その瞬間、刀身は鏢元から甲高い音を発して折れ飛んだ。鈍色の刃は空中を回転して床に突き刺さり、そこでさらに二つに折れる。

「よく、あなたは平気でしたね……」

目を丸くして折れた剣を凝視したあと、フィルは両手で抱えている大剣に視線を向ける。黒い刀身に白い稲妻状の模様を走らせた剣は、鏢に埋めこまれた四色の寶石を点滅させた。

「あのようなまくらといっしょにしないほしい」

傲岸不遜な声音。この魔剣は意思を持ち、また声を発することができるのだ。ホルプというのが魔剣の名であり、ロックを己の所持者と認めている。

自分がつくった魔剣をなまくら呼ばわりされて、フィルは翠玉の瞳に不満そうな感情をにじませた。たしかに大急ぎでつくったのだし、そもそも実験のために用意したのだから強度以外の点についてはおざなりな処置しかほどこしていない。

それでもやはり気に入らなかつた。

「そんなに自分に自信があるなら、今度私の実験につきあってください。いえ、つきあっても構いません。たいしたことではありませんよ……錆についてちょっと研究をしたいだけで」

『人間にとつての毒と同じくらい、いやな言葉が聞こえたのだが』

「錆ではなくて、酸に関する実験でもかまいませんが。あなたならへっちゃらですよ」

フィルと魔剣が心温まる会話をかわしている間に、ロックは次の剣を試していた。

三本目は十数回もつたように見えて、いつのまにか細かな亀裂が無数に走っており、振りかぶったとたんにぼろぼろと崩れ落ちる。四本目はたった二撃で折れた。

「……エリシアの盾は、本当にだいたいどうぶなんですか？」

不安を隠せない表情で、ナギがフィルを見た。ロックの振るう剣がこれだけすさまじい折れ方を見せては、彼女がそうした危惧を抱くのも無理はない。

「たしかにロックの呪いは相手の魔剣を折る方へ働くこともありませんが、盾を攻めているかぎりはいじょうぶだと思えます。すくなくとも、これまでの稽古などではそうでした」

それに、この実験にエリシアは進んで賛成している。彼女にはそれだけの覚悟があるのだ。最後の五本目をロックが振るう。

一本目と同じく、一撃ももたなかつた。刀身がまるでガラス細工のように粉々に吹き飛び、細かな破片のひとつがロックの頬をかすめる。

「くそっ！」

呆然と立ちすくんでいたロックは、我に返るとおもわず悪態をつき、苛立ちも露わに手の中に残った柄を床に叩きつけた。柄だけになった魔剣が床に転がる。それから自分を氣遣わしげに見るエリシアの視線に氣づく、恥じ入るように目を伏せた。

「ロック、エリシア。おつかれさまでした」

ナギがふたりにそれぞれタオルを渡す。五本の魔剣を振るって、ロックはかなりの汗をかいていた。それを受けとめていたエリシアも、うつすらとだが顔に汗をにじませている。

「おつかれさまでした、ロック。おかげでいろいろとわかりました」

抑揚のない声で、フィルがナギの隣に並んだ。

「……ごめん、フィル」

ロックは素直に頭を下げる。彼女が自分のために魔剣を用意してくれたのに、感情任せにそれを床に叩きつけるのは、やっていいことではなかつた。フィルは静かに首を横に振る。

「氣にすることはしないでですよ。言ってしまうえば、壊すために造ったものですから」

『では、君の見解を聞こう』

フィルのちいさな手に抱えられている大剣が、鏢にある宝石を明滅させた。

「見解というほどのものではないですが……」

タオルで汗を拭うロックを見ながら、フィルは言葉をさがすような、どこか迷う表情で視線

を泳がせた。床に散らばっている無数の破片を一瞥する。

「ロックが五本目に使った剣。あれはスプリガンの魔鋼を三つ使って造ったものです」

その言葉に、ロックだけでなくエリシアとナギまで目が瞠った。

『皆が驚いているようだが、すごいのか、それは』
「すごいなんてもんじゃないわよ」

エリシアが呆れた顔で魔剣を見た。

「あなたにとっては大したことのない魔物なのかもしれないけどね、スプリガンは銀色の首環つきなの。強敵なのよ」

首環は元々人間の文化であり、地位のある者や武勲をたてた戦士に贈られる名誉の証なのだ。魔物はそれを取り入れたのだ。

黄金の首環つきほどではないにしても強大な魔物は白銀の首環を、それより弱い、下級とってよい魔物は青銅の首環をつけている。それ以下の魔物は何もつけていないという具合に。「あいつの魔鋼の相場は、銀貨でだいたい四百枚。そこそこの暮らしなら、三ヶ月は何もせずに食べていけるだけの価値があるわ」

「エリシアは贅沢が染みついてますから一月もたない気がしますけどね」

フィルの言葉に、ナギは驚きと呆れの入り混じった顔になる。慌ててエリシアは弁明した。「そ、そんなことないわよ!? 三ヶ月どころか半年もたせる自信だってあるわ!」

「無理だな」

「無理ですわね」

ロックとフィルが同時に否定し、エリシアは見えない拳に打ちのめされたかのようによろめく。間髪入れずに二人がかりで否定されると辛い。

『つまり、あの剣は銀貨で千二百枚分の価値があったということか』

なんともつたいないというホルプのつぶやきが聞こえた気がして、ロックはおもわず魔剣を凝視する。だが、とくに反応を見せないのが気のせいだと思ふことにした。口を開けば戦いばかりを切望する魔剣である。銀貨がもつたいたいなどと言はずがない。

「はい。そんな魔剣は特注でなければ扱いません。私としても、この前の大陸行きで大量に稼げなければ、造るのをためらいました」

「市場などで錬成師が売っているような魔剣に、銀色の首環つきの魔鋼を素材にしているものなんてあまりありませんからね」

フィルの言葉にナギが同意すれば、立ち直ったエリシアもうなずく。

「たまに掘り出し物扱いで出てくるぐらいよね」

「結論。そんじよそこで売っているような魔剣では、もはやロックの役に立ちません」

フィルはできるだけ淡々と言ったつもりだったが、それでもやや声がうわずってしまった。

ロックには、呪いがかけられている。『瘴気を浴びるほどに、魔剣を破壊しやすくなる』と

いうものであり、リヤナンシーという魔物が何年も前にほどこしたのだ。

自分に呪いがかけられていたことを、つい先日、そのリヤナンシーの口から聞かされるまでロックは知らなかった。魔剣を破壊してしまう原因がわからなかったことや、師であるバルトウータスもそうだったからというのもあるが、それは自分の体質だと思っていたのだ。

そして、そう思うことができたのは、呪いの効果が弱かったからに他ならない。

「でも、ロックのそれって、そんなに強力だったかしら？」
小剣を盾に納め、紫結晶の輝きを消すとエリシアは首をかしげた。呪い、という単語を避けたのは彼女なりの配慮だ。

「呪いが強まっているのだろう」

ホルプはごく自然に、呪いという言葉を使つてのけた。エリシアは眉をひそめたが、魔剣が説明を続ける気配を見せたのでおとなしく耳を傾ける。

『魔物を斬つて瘴気を浴びるほど、魔剣を折りやすくする——。これは数だけでなく、質——魔物の強さも関係している。黄金の首環つきのような、より強い魔物の瘴気は、並みの魔物よりはるかに呪いを強めるのだ』

沈黙が降りた。ロックは床に散らばる魔剣の残骸を無言で見つめ、エリシアたちは弱ったような視線をかわす。やがて、エリシアが碧い瞳をロックに向けた。

「ロックは、これからどうするの？」

「これから？」

おうむ返しでの質問が、ロックの悩みの深さを語っている。遠慮がちにフィルが進みでた。

「マナやエイモンさんにも、ロックのことについて調べてもらうようお願いしました。あまり気を落とさないでください」

マナはフィルの姉弟子とでもいうべき錬成師だ。頼りになる人物なのは間違いない。

「……そうだな。ありがとう、フィル」

元々この実験は、ロックが頼んだことである。自分がかけられた呪いについてすこしでも詳しく知っておきたかったのだ。

「しかしまあ、おまえはつくづく頑丈にできてるなあ」

フィルから受け取った魔剣をかざして、ロックは感心とも呆れともつかない声をあげた。この魔剣は、ロックの呪いにも平然と耐えている。

『当然だ。そのていどの呪いに負ける私ではない』

「頼りにしてるよ」

苦笑して、ロックは魔剣を背負った。

風を白い帆にはらませ、大陸を遠くに見ながら海を行く、一隻の船がある。二本の巨大な帆

柱を持つなかなか大きな帆船だ。

都市間を往復する交易船だが、今回はあまり荷を積んでおらず、代わりに客を多く乗せていた。この船は先日コノートを出て、ドニゴール島へ向かっている。

大陸から充分な距離があり、かつ一定以上の大きさを持つ島々は、都市を支えるための生産地となっていた。ひとつの都市につき、だいたい二十近い島を所有している。

ドニゴールはシュリガツハの領有であり、およそ五十日後に、ガリーヤはこの島の近くを通過する。そのため、ガリーヤ奪還計画の拠点として選ばれたのだった。

この戦いに参加する魔剣使いや錬成師たちは、暮らしている都市を発って一路ドニゴールを目指している。さまざまな物資を積んだ船も次々にそちらへ向かっていた。

ロックたちが乗っているこの船も、そうしたもののひとつだ。船倉の一部を改造して船室を増やし、より多くの客を乗せている。

「……まさか、大部屋に押しこめられるなんて思わなかったわ」
揺れる船の底で、エリシアは悪態をついた。

獵師小屋でいどの広さの部屋に、十人以上の人間がいる。いずれも旅慣れた服装をした者ばかりで、魔剣使いか錬成師だとすぐにわかった。彼らの目的地もドニゴール島だ。

「乗ることができただけいいですよ」
ふてくされるエリシアをナギがなだめる。ロックも室内を見回しながら同意した。

「船に乗れなかったひとたちがまだ港に残っていたものな」

ガリーヤ奪還の戦いが発表されると、コノートの人々は熱狂と歓呼かんこの声をあげた。ベルティネの祭りの余韻が残っていたということもあるが、魔物に対して常に守りの態勢を強いられてきた者たちに、攻めるといふ言葉が新鮮に響いたのは間違いない。

それは、予定外の戦いを強いられた魔剣使いギルドや錬成師たちも同様だった。翌日には白熱した会議が行われ、ただちに五十人近い魔剣使いと錬成師が選びだされたほどだ。

食糧や水、燃料などさまざまな物資が用意され、それを輸送する船の手配も優先して整えられていったのだが、若干の混乱も生じていた。

出港を後回しにされた船が、続出したのだ。ロックたちの乗っているこの船も、海に出たのは予定日を数日過ぎてからだだった。

「前向きに考えようぜ、エリシア。俺たちはむしろ運がいい」

「それは、乗れなかったひとに比べればそうかもしれないけど……」

天井から吊り下げられたランプは汚れていて、あまり明るいとはいえない。床に、申し訳いどに敷かれている絨毯も薄っぺらくて汚れている。部屋の広さは全員がどうにか横になることができるぐらいにはあるが、そうなったら文字通り足の踏み場もなくなるだろう。

「……変な臭いがします」

フィルが顔をしかめ、袖で鼻をおさえる。彼女の言うとおり、妙な臭いの混じった熱気が室

内に充滿していた。

「これだけひとがいるから仕方ないんじゃないか」

「でも、ドニゴールまで二十日以上かかるんでしょ。途中で何度か島に寄るといっても、着くまでずうつとこれなのよ？」

できるだけ明るい口調でフィルを慰めようとしたロックだが、エリシアの憤然とした声に、困ったように砂色の髪をかく。内心では共感しているので、反論しづらい。

「エイモンさんも、もうちよつといい船とか、これよりましな部屋を用意してくれてもいいと思うわ。こっちはいろいろと協力したんだから」

ロックたちがこの船に乗ることができたのはエイモンの口利きがあつたからだ。それがなければコノートを発つのに、さらに数日後の機会を待たなければならなかつただろう。

「そういえば巫女をやったりしましたね、エリシアが」

鼻をおさえたまま、フィルが薄ら笑いを浮かべる。エリシアはそのときのことを思いだしたのか頬を赤く染めると、一瞬ロックに視線を向けかけ、すぐにぶいと顔をそむけた。

「でも、たしかにいい雰囲気ではないですね。さつきから、なんだかじろじろ見られている気がしますし……」

「やはり女性の魔剣使いというのが珍しいのではないでしょうか」

フィルの言葉に、ナギが首をかしげる。この部屋にいる女性はエリシアたち三人だけだ。

「念のため、交替で寝ることにするか？ 動くときも、なるべく二人一組で」

エリシアたちにしか聞こえないような小さな声で、ロックはそう提案する。

見知らぬ者同士の集まった部屋だ。暴力沙汰だけでなく、盗難などの危険もある。加えてこちらには女性がいるのだ。よからぬことを考える者がいるかもしれない。

「そうね。着くまで面倒ごとを避けたいし……」

エリシアがそこまで言ったところで、ひとりの男が大股でこちらへ歩み寄ってきた。粗末な革鎧かわよろいを着こんだ、筋骨隆々たる大男だ。腰には鈍なたのような大振りきこつりの魔剣を下げている。

「お嬢ちゃんたち、どうだい？ オレと飲まねえか」

「遠慮しておくわ。こんな揺れる船の中じゃお酒を飲む気になんてなれないの」

フィルをかばうように立ってエリシアはすげなくあしらったが、男は引き下がらない。

「つれないこと言うなよ。酔ったらオレが介抱かいぼうしてやるから」

男は下卑げひた笑い声をあげてエリシアにつめよろうとしたが、その前に、ロックがふたりの間に割って入った。

「なんだ、おまえは？ ひっこんでろよ」

「あいにくだが、こいつらは俺の連れだ」

すこんでみせる男に、臆おそする様子もなくロックが応じる。男は苛立いらだちも露あらわに睥睨へいげんし、ロックが背負っている魔剣に気づいた。

「ガキの割にずいぶん派手な魔剣を持つてるじゃねえか。甲板に出て、オレと勝負しようぜ」挑発的に笑って、男は自分の腰にある武器を叩く。ロックも背中の中の魔剣に手をかけたが、柄を握りしめたところで、さっと怯えの色が走った。

そのときロックの脳裏をよぎったのは、コノートで自分が破壊した五本の魔剣だ。

ホルプは——自分の背にあるこの魔剣は、呪いで折れたりほしくない。それはもちろんわかっている。しかし、それでもロックは柄の感触に心が冷えるものを感じた。

そして、そのような内心を見抜くことはできなかったが、すくなくとも表面に現れた変化を男は見逃さなかった。笑いの種類を見下すようなものに変えて、侮蔑の言葉を吐きだす。

「なんだ、おい。びびってるのか？ 情けねえなあ。ガキがいきがって、派手なだけの魔剣なんぞ持って女の前でかっこつけようとするから……」

「——騒がしいな」

その短い一言が、男の声をさえぎった。

部屋の隅にうずくまるようにして座っていた初老の男が、ゆらりと立ち上がる。細面で、艶のない灰色の髪と鷲鼻が特徴的な男だった。背丈はロックと同じぐらいで、首からは薄汚れた褐色の外套に包まれている。

ロックたちは半ば呆然として、その鷲鼻の男を見つめていた。男はやや背を丸め、足を引きずるようにしてこちらへ歩いてくる。大男を見上げると冷笑を浮かべた。

「ここはおまえの部屋じゃねえんだ。それがわかったら隅っこでおとなしくしているこった」

大男は激昂し、標的をロックから鷲鼻の男へと変えた。拳を握りしめ、たくましい腕を見つけて恫喝する。

「なんだ、じじい。てめえがオレの相手をするってのか？」

他のひとを巻きこむわけにはいかない。あらためて割って入ろうとしたロックを、鷲鼻の男は視線だけで静止した。ロックは申し訳ない思いをしながらも、口をつぐんで足を止める。ただし、何かあつたらすぐに動けるよう身構えた。

鷲鼻の男は肩をすくめて蔑むような笑みを大男に向ける。

「相手をしてやってもいいが……剣と拳、どちらにする？ わしは、拳にはいささかなりと自信があるぞ」

「じゃあ拳にしてやるぜ。骨が砕けることはあっても、首が飛んだりはしねえからな」老戦士の挑発に、大男は胸を張って応じる、その直後だった。

恐るべき速さで突きだされた老戦士の左腕が、大男の顎の下で止まっていた。

だが、ロックはその速さに唖然とするよりも、彼の左腕そのものを驚愕の眼差しで見つめていた。生身の腕は肘のあたりまでしかなく、そこから先にあるのは鉄製の義手だったのだ。

不意を打たれたことと、あまりの早業に何も言えずあえいでいる大男を、鷲鼻の戦士は底意地の悪い笑みを浮かべて見上げた。

「……拳の勝負だったな、小僧？」

鈍色の義手が大男の頸に押しつけられる。大男の戦意は波をかぶった砂の塔のように、たちまちの内に崩れ去った。老戦士が義手を下ろすと、大男は背を向けて足早に部屋を出ていく。緊迫した空気が溶けて消え去り、ロックは安堵の息をついて老戦士に頭を下げた。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

「だらしのないの、最近の若者は」

しかし、老人の表情はまったくもって呆れ果てたと言いたげなものだった。言葉に詰まるロックに、老戦士は義手を隠すように外套を羽織り直しながら言葉を重ねる。

「ああいう手合いに出くわしたら、問答無用で殴り飛ばすぐらいのことはせんか」

「……いや、いくらなんでもそれはちよつと」

ロックにしてみれば、あのようながらの悪い相手は酒場での仕事で慣れている。暴力沙汰を回避できるならそれに越したことはない、ていどの考えはあった。

「まあ、あの男にびびったわけではなさそうだから、小言はこれぐらいにしておいてやるか」
驚鼻の老人は口の端を吊り上げて笑うと、踵を返して、さきほどまで座っていたところへ歩いていく。ナギが前に出て、その背中に呼びかけた。

「あの……あなたはもしかしてサイフォスさんでは？」

「さん、はいらんよ。嬢ちゃん」



老人はそれだけ答えると、隅に座つてうずくまる。

「知ってるの？」

エリシアが怪訝けげんそうな顔でナギを見た。ナギは老人から視線を離さず、こくりとうなづく。

「錬成術れんせいじゆつで造りあげた義手を左腕につけた『鉄腕てつわん』の異名をとる魔剣使いの話聞いたことがありません。主にコノートとシュリガツハの二都市で活躍する熟練じゆくせんの戦士だと」

「へえ。なんだか又アザみたいね」

エリシアが感心したような声をあげた。又アザは神々の王だ。片腕が銀で造られた義手であるために『銀腕ぎんわんの又アザ』という異名を持ち『光の剣ひかりのけん』を所持していたとされる。

「私の先生よりもお年を召してそうですわね」

ロッキの陰に隠れながら、フィルがもの珍しそうな、感心したような視線を老人に向けた。フィルの師であるナイジェルは今年で四十二歳。かつては魔剣使いであり、錬成師れんせいしでもあった

が、何年も前に片脚を痛めて引退したのだ。

ロッキはしばらくの間、サイフォスをじっと見つめていた。なんとも言葉にしがたい感情が胸の内から湧きあがってくる。

その感情についてロッキは自覚したものの、正体についてはわからなかった。

交易船が島に立ち寄ったのは、コノートを出航してから数日後のことだった。

町や村のある島に何度か寄つて、そのたびに食糧と水を補充し、船の点検をするため一晩泊まる。そうして航海を続け、ドニゴール島を目指すというのが今回の船旅だ。

「島ではなくて、シュリガツハとかに寄るわけにはいかないのでしょうか」

甲板かたはに立って近づいてくる島を眺めながら、フィルが首をかしげた。

四人とも、昼間などはなるべく甲板に出るようにしている。初夏の陽光が厳しく照りつけてくるとはいえ、吹き抜ける風と波の響き、海鳥の鳴き声はまだ涼しさを与えてくれるからだ。

フィルの疑問に、隣で船縁に寄りかかっていたエリシアが首を振った。

「あたしたちがコノートを発った日のことを思い出してみなさい。シュリガツハもあれと変わらないうわ」

「混乱を避けるために、島から島へ向かっているというわけか」

納得したように肩をすくめるロッキに、やや疲れを漂わせた顔でナギが提案する。

「ロッキ。今日は村に泊まりましょう」

客の中で金銭に余裕のある者や船で過ごすことに耐えられなくなった者は、島の中にある村へ行って宿を求めることが多い。

「そうだな。こんなところで金を惜しむこともないか」

ロッキは笑顔で承諾しょうだくした。安全を考えれば、たとえ一晩でも村に泊まったほうがいい。それ

に、エリシアたちも湯浴みぐらいしたいだろう。

なにしろ船に乗ってからは、水を絞った布で身体を拭くのがせいぜいだ。水そのものは、海水を錬成術けんせいじゆつによって真水に変えるとしても、水浴びができるような設備がない。

客の中には人前で堂々と服を脱いで汗を拭いている者もいるが、さすがにそんな真似まねは三人ともしなかったし、ロックとしてもさせたくなかった。

日が傾かたむいてきたころに船が島に停泊すると、翌日の朝には戻ると船長に告げて、ロックたちは船を下りた。船着場を出てすぐに見えた村はそれほど大きくもなく、質素しやくそくや素朴そぼくという単語がふさわしい雰囲気に包まれている。

「——こうして地面を歩いて、何か揺れている気がしますね」

そう言いながらもどこかほっとした顔つきで、フィルが地面を踏みしめた。

「だいじょうぶか？ 何日間も船の上だったからな」

フィルをいたわるロックの隣で、エリシアが大きく伸びをする。

「でも、今日はひさしぶりに揺れない地面の上で眠れるわよ」

「そうですね。私もひさしぶりに、エリシアの寝相ねそうの悪さを気にせずすみそうです」

淡々とした口調でフィルが毒を吐いた。

「え、そんなに悪かった？」

不意を突かれたこともあって、エリシアは戸惑とまどったように顔をしかめる。フィルは冷淡な笑

みをにじませてそれ以上は何も言わず、ナギは笑顔のままだが眉がわずかに下がっており、返答に困っている様子なのがうかがえる。仕方なくロックが口を開いた。

「……ときどき、フィルやナギにしがみついて枕にしようとしたのは見たな」

「ロックに場所を替わってもらおうようお願いしたのに、断られました。ロックは薄情です」

「いや、まずいだろ、いろいろと。それに実害はないっばかったし」

「あんな暑苦しいところで、こんなのにしがみつかれるんですよ？」

よほど腹に据えかねてもいたらしい、うろたえるロックにもフィルは容赦ようじやがない。エリシアは申し訳なさそうに頭を下げた。

「ご、ごめんね。でも、それならもっと早く言ってくれば……」

「こう言つてはなんです、あの状況ではたとえ言つてもやりようはないと思つたので」

ナギも苦笑を浮かべる。自分たち以外にも大勢の客がいる大部屋だ。「鉄腕てつわん」サイフォスの存在がとりあえず室内の平穏を保っており、初日のときのような出来事は起きていないが、だからこそこのでいどのことで騒ぐわけにはいかなかった。

「ドニゴールまで、まだ先は長いからな。今日はしっかり休もう」

明るい声こゑ音でのロックの言葉に、エリシアたちは顔を見合わせた。

村にある宿はひとつだけだった。丸太を重ねて建てて漆喰を塗った簡素な造りだが、しつかりして清潔感がある。一夜の宿を求めて船を下りた者はロックたち以外にもかなりいて、宿では一部屋しか借りることができなかったが、エリシアやフィルはそれでも嬉しそうだった。

聞いてみると村に浴場はないということだったので、ロックたちは大きな桶を借りて、村の中を流れる川から水を汲んで運び、フィルの錬成術でそれを沸かす。

「ロック。先にお湯を使う？ あたしたちは三人だから時間もかかるし」

「訊くというよりもそう勧めたエリシアに、ロックは首を横に振った。

「ホルプの手入れもまだだからさ。おまえたち先にすませるよ」

「……うん、わかった」

エリシアもそれ以上強くは言わない。ロックに外で待ってもらってすばやく服を脱ぎ去る。

身体の一部、それも人目を避けながら拭いていたのにくらべて、ここでは服を脱いで、湯を使うことができる。運ぶ手間はあがあるが、いくらでも使っていくというのもありがたい。

三人の少女は髪を洗って、身体を拭いて、しばらくの間湯のあたたかさを身体にしみこませるようにして疲れをとっていたが、不意にエリシアは手を止め、フィルとナギを見つめた。

「——ちよっと話があるんだけど、いい？」

その真剣な声音に、ふたりの少女も床に座りなおす。

「いまのうちにたしかめておきたいことがあるの」

「たしかめる、って何をですか？」

フィルが首をかしげた。ナギも無言で眉をひそめる。

「あたしたちの今後について、よ」

話しながら、エリシアは手にしているタオルを強く握りしめていた。彼女にとって、それほど勇気のある話題だったのだ。

「もしも……ロックが魔剣使いであることをやめたら、どうする？」

この続きは9月17日発売の

『千の魔剣と盾の乙女4』を

お楽しみに！